

今、日本が変わりつつあります。

人を思いやる気持ちが強まり、社会に新たな絆が生まれ、そして、自然を愛し、生物多様性を大切に考える人が増えたように感じます。

私たち日本人は、古来より豊かな自然と共に生き、生物多様性を理解し、生活の糧としてきました。しかし現代になって、

その文化が失われつつあることは事実です。

今一度、先人達が育んできた自然にたいする考え方や文化を理解し、現代に合う形で実践しなければなりません。

実現できれば、きっと、世界に響くメッセージになるでしょう。

Biodiversity is our life.

私たちは、生物多様性の中に生きているのです。

MISIA

What's Biodiversity?

あらゆる生命が、つながり合い、支え合い、生きること。
地球上の生きものは、様々な環境に適応して進化し、多様な生きものが生まれました。
その数、推定できているだけで150万種。
すべての生きものは、ひとつの種だけでは生きることができません。
生きものと生きものをつながりの中で、生きています。
地球上には、森林、里地里山、河川、湿原、干潟、サンゴ礁などいろいろなタイプの自然があります。
生物多様性のたくさんの恵みによって、私たち人間を含む生きものの「いのち」と「暮らし」が支えられています。

What's 里山(SATOYAMA)?

里山とは、水田や雑木林、ため池、農家の社など、様々な要素がモザイクのように入り組んだ景観のこと。
国土の大半を森におおわれた日本では、いかに自然と調和した生活を送るかが大きなテーマでした。
薪を取るために必要なだけ伐採する。落ち葉は田畑の肥料に使う。里山は、生き物にとっても住みやすい場所です。
ため池にカエルが住んだり、そのカエルをエサとする小動物が池に来ます。

今、生物多様性は危機的状況にあります。

開発や乱獲による種の減少/絶滅、生息・生育地の減少・過剰化や高齢化によって、里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下、外来種の侵入等による生態系の攪乱、地球規模の気候変動によって、海面水位が上昇するため、危険な状態にある生きものがたくさんいます。
現在、日本の野生動物の約3割が絶滅の危機にあります。

COP10、そして国連生物多様性の10年へ

2010年10月、愛知県名古屋市にて生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されました。
2年に一度開催される会議では、締約国179か国、国際機関やNGO等オブザーバー、スタッフを含め13,000人以上が参加。
約350の公式イベントも開催される大きな会議となりました。会議では「名古屋議定書」と「愛知ターゲット」が採択。
2050年までに、「自然と共生する世界を実現」することが目指されています。
そして2011年から2020年までを国連生物多様性の10年とすることが、12月の国連総会で承認されました。
これから10年かけて、自然と共生する社会づくりが取り組まれます。

COP10の主な成果

- (1) 遺伝資源の取得と利益配分(ABS)に関する名古屋議定書：主に途上国から生まれる遺伝資源から利益を上げた場合、その遺伝資源を利用する先進国の企業と途上国で利益を公正に配分することを義務付ける国際ルールが設定されました。
- (2) SATOYAMA INITIATIVE：日本も含めた世界各地で、現代に合う形で、土地と自然資源の適切な利用や管理を行う国際的な試み。自然と人間が、豊かで幸せな生活を送れるようになることを目指しています。
- (3) 自治体の取り組みの強化：2020年までの地方自治体の生物多様性に関する行動計画を承認しました。

国連生物多様性の10年

2010年12月に第65回国連総会で、2011年から2020年を、「生物多様性の10年」と位置付け、国際社会が協力して生態系保全に取り込むことが採択されました。
この10年間の取り組みを通じて生物多様性の主流化を推進し、「いのちの共生を、未来へ」(LIVING IN HARMONY WITH NATURE INTO THE FUTURE)のメッセージを発信していきます。
愛知ターゲットの達成に向けた締約国の法整備やプログラムの実施をサポートするほか、政府だけでなく、NGO、先住民や地域住民、民間企業、専門家、メディア、ユースなど、多様な個人や団体が参加して生物多様性への理解を深めることで、目標の達成を目指します。

各地のシンボルいきものデータ

日本にはまだ、あなたの知らないたくさんのいきものがいます。
全国には国立公園、ビジターセンターが100か所あります。
あなたの住む地域の近くにいる、いきものに会いに行きませんか？

